

研究論文

ブルーナーの構成主義とネオプラグマティズム ——ブルーナーによるグッドマンとローティの受容——

嶋 口 裕 基

Constructivism of Jerome Bruner and Neo Pragmatism: Bruner's Acceptance of Nelson Goodman's Theory of Worldmaking and Richard Rorty's Interpretations of Pragmatism

Hiroki Shimaguchi

はじめに

アメリカの心理学者ジェローム・シーモア・ブルーナー (Bruner, Jerome Seymour, 1915-2016) は、ウィリアム・ジェイムズ (James, William, 1842-1910)、チャールズ・サンダース・パーズ (Peirce, Charles Sanders, 1839-1914)、ジョン・デューイ (Dewey, John, 1859-1952) のプラグマティズムの伝統に位置づくという、ハワード・ガードナー (Gardner, H.) およびデイビッド・バクハースト (Bakuhurst, D.) とスチュアート・シャンカー (Shanker, S. G.) の見解がある¹。この見解に基づけば、ブルーナーは古典的プラグマティストの系統に属するということになる。

しかしブルーナーが自らの立場であるとする「構成主義」(constructivism) に目を向ければ、古典的プラグマティストの観点のみでブルーナーを理解してよいと一概に言えなくなる。ブルーナーの構成主義ではネルソン・グッドマン (Goodman, Nelson, 1906-1998) の世界制作論が受容されているため言語を重視しているといえ、加えてリチャード・ローティ (Rorty, Richard McKay, 1931-2007) のプラグマティズム解釈を受容して論じられたプラグマティズムに基づいている。ブルーナーがネオプラグマティストの系統に属している可能性がある。

ガードナーやバクハーストラの見解において、グッドマンやローティについては言及されていない。ブルーナーの構成主義にグッドマンの世界制作論が関係しているという言及はある²が、その言及ではブルーナーの構成主義とネオプラグマティズムの関連について問われていない。ブルーナーが提唱した文化心理学 (cultural psychology) を根拠に、心理学史という視野からブルーナーをローティのいうアイロニストと見なす見解があるが³、その見解はブルーナーの構成主義をネオプラグマティズムと関連づけたものではない。このように、ブルーナーがネオプラグマティストに位置づく可能性がありながら、ブルーナーの構成主義がネオプラグマ

ティズムの観点から検討されていない。

ネオプラグマティズムを観点にブルーナーの構成主義を検討し、プラグマティストの系譜におけるブルーナーの位置を問い直すことが、本稿の目的である。

ブルーナーの構成主義はグッドマンの世界制作論とローティのプラグマティズム解釈を受容し、構築されている。本稿ではブルーナーの構成主義とグッドマンの世界制作論の関係、ブルーナーの構成主義とローティのプラグマティズム解釈の関係を確認し、ネオプラグマティズムを観点にブルーナーの構成主義を検討する。

1. ブルーナーの構成主義とグッドマンの世界制作論

ブルーナーの構成主義は「われわれが身をおいている『世界』に負わせる『实在』(reality)は構成されたもの (constructed one) である」とする立場である⁴。

ブルーナーは自らの構成主義の源はエルンスト・マッハ (Mach, E) の『感覚の分析』(*The Analysis of Sensation*, 1886) にあったとし、イマヌエル・カント (Kant, I) を読むことによって自身の立場を修正したと言っている。しかしブルーナーは自身の構成主義をカントのもの (Kantian) ではなく、「ネルソン・グッドマンがそれから私を治療してくれた」と明言する。続けて、「『实在』は世界に向けて人がとるスタンスに常に相関的であり、人は多くの異なるスタンスをとることができる」と述べている⁵。ブルーナーがグッドマンから得たことは、「实在の唯一の『根本的に真である』ヴァージョンはない」ということである。それゆえ、「例えば、家を建てる際にわれわれは『大工の見方』をとり、巻尺と丁字定規に応じて作業を進める」⁶ように、实在には世界に向けて人がとるスタンスと相関的に構成された様々なヴァージョンがあるというのがブルーナーの構成主義である。

唯一の根本的に真である实在のヴァージョンはないこと、实在はスタンスと相関的に構成されるということは、グッドマンの世界制作論でも論じられている。

グッドマンのいう世界制作は「言葉、数字、絵、音、あるいはその他、あらゆる媒体におけるあらゆる記号 (symbols) を使ったこのようなヴァージョン [= 科学、藝術、知覚、日常談話といったこと] の制作によって、さまざまな世界が制作される」⁷ということ、すなわち記号とその利用によって諸世界が制作されるというものである。制作される諸世界に唯一正しいといえるものはない。グッドマンがいうには、「『世界』(‘the world’) とはおそらくあらゆる正しいヴァージョンが記述するところのものだろう」が、「数多くの異なった世界 = ヴァージョン (world-versions) があるという事実にはほとんど議論の余地はない」し、「数多くの異なった世界 = ヴァージョンは、唯一の基盤へ還元できるという可能性を要求ないし前提することなく、独立の意義と重要性をもつ」⁸。グッドマンの世界制作論においては、世界 = ヴァージョンはそれぞれに意義と重要性をもって複数あることから、あらゆる正しいヴァージョンである「世界」は想定されていない。

加えてグッドマンは「世界における実在は…大部分習慣の問題」であるので、「ひとつの世界を求めるわれわれの情熱は、さまざまな場合、さまざまな目的により、多くのさまざまな仕方
で満たされることになる」がゆえに、「実在さえも相関的なのだ」という⁹。グッドマンは実在を目的等に相関的なものとみなしている。

ブルーナーの構成主義がグッドマンの世界制作論に沿っていることは確かである。唯一の正しいヴァージョンである「世界」はブルーナーのいう「実在の唯一の『根本的に真である』ヴァージョン」に相当している。実在が目的等に相関的であることは、ブルーナーにとってスタンスに相関的であることに相当する。

「世界」は存在しないこと、実在は目的等に相関的であることを、ブルーナーは世界制作論から自らの構成主義に取り入れている。しかしブルーナーはグッドマンの世界制作論のすべてを受容したわけではない。ブルーナーは相対主義の回避に関するグッドマンの考えを受け入れず、批判している。

ブルーナーによれば、グッドマンの世界制作論は「世界の誤った様々なモデルから真を区別する方法としての対応の基準を失う」条件のもとにある。この条件において、「結果として起きおそれがある相対主義の疾走に対し、何がわれわれを保護できるのか」と、ブルーナーはグッドマンに問う¹⁰。

この問いに対し、ブルーナーはグッドマンでは答えられないと次のように見立てる。ブルーナーによれば「グッドマンの〔相対主義に対する〕解決策は諸ヴァージョン (versions) と諸世界 (worlds) を区別することによって始まる」¹¹が、グッドマンは「世界 (the world) はヴァージョンそれ自体ではない。なぜなら、ヴァージョンは英語であつたりさまざまな語で構成されたりしているような特徴をもちうるが、世界はそうでないからだ」と言う一方で「われわれは諸ヴァージョンをつくり、正しい諸ヴァージョンは諸世界をつくる。そしてたとえ異なった諸世界が正しい諸ヴァージョンから生まれ得るとしても、正しい諸ヴァージョンをつくることは諸世界をつくることなのだ」と述べている¹²。このことから、ブルーナーは「グッドマンの答えはあいまいだ。彼は諸世界と諸ヴァージョンに違いがある、違いがないと両方いつているように思われる」と指摘している¹³。それゆえ相対主義は回避できないと、ブルーナーはグッドマンの考えを批判している。

2. ブルーナーの構成主義とローティのプラグマティズム解釈

ブルーナーは『意味の復権』(Acts of Meaning, 1990)において、構成主義が「『何でもあり』(“anything goes”)の相対主義」に導かれるのではないかという問いを発している。というのも、例えば社会的世界もわれわれが構成し、かつ、われわれでその出来を判断するのであれば、相対主義から免れないかのように考えられるからである¹⁴。このことから、ブルーナーの構成主義にとっても相対主義は回避すべきものである。

ブルーナーは「構成主義の基本的な主張は単純で、認識(knowledge)はわれわれが当然と思って選択したパースペクティブ(perspective)に照らして『正しい』(right)か『誤り』(wrong)かということである」¹⁵と述べているように、パースペクティブによって認識の正誤が判断できるので相対主義を回避できると主張する。パースペクティブはスタンスとほぼ同義である。ブルーナーは別のところで「スタンスは結局のところ活動の中のパースペクティブである」と述べているからである¹⁶。スタンスに相関して実在が構成されるという、グッドマンから受容した考えに基づいている。

しかしパースペクティブによって認識の正しさが判断できるという主張を展開するにあたって、参照しているのはブルーナーはグッドマンの世界制作論ではなく、『プラグマティズムの帰結』(*Consequences of Pragmatism*, 1982)でのローティのプラグマティズム解釈である。その概要は次の通りである¹⁷。

ブルーナーが参照しているローティのプラグマティズム解釈とは、論文「プラグマティズム・相対主義・非合理主義」(“Pragmatism, Relativism, and Irrationalism,” 1980)で示されたプラグマティズムの第一の特徴、すなわちプラグマティズムは「真理」や「知識」(knowledge)などに「反本質主義」(anti-essentialism)を適用しているということである。ローティはこれをジェイムズの「真理」(“the true”)の定義「信仰の面から見て、善であること」(what is good in the way of belief)¹⁸から説明する。ローティは、ジェイムズの「主眼は、真理は『実在との対応』であると言われても無駄だということだ…人は確かに、人が信じている文は世界におけるもろもろの事柄との関係と同型の内的な構造をもつという方法で人が世界と見なしている部分と〔言語の部分と〕対応させることはできる」とする¹⁹。しかし「ネコがマットの上にいる」²⁰というような単純な文をひとたび超え、全称命題(universals)や仮言命題(hypotheticals)または理論を論じ始めると²¹、そのような対応づけは「混乱した場当たりのなもの」になる。そのような対応づけを行うことは「なぜ私たちの今の世界の見方が、大まかに言って、われわれが抱くべきものなのか、あるいはそうなのかどうか」を決定するのに役立たない。そのようなことを行えば、「本質をもつ真理を欲すること」になるとローティは主張している。しかし真理について有益な何かをいうには、「理論より実践…観想より行為を探索する」²²ことである。それゆえ、「歴史とは階級闘争の物語である」といった文は、「その確言はそれを正しくするのか」²³という問いより、ブルーナーが「プラグマティックで、パースペクティブな問い」(pragmatic, perspectival questions)と呼ぶ²⁴、「それを信じるとはどういうことか」や「もし私がそれを信じたら、私は何に関与していることになるのか」という問い²⁵の方がふさわしい。

ブルーナーはローティが特徴づけた反本質主義に対し、構成主義について「私が表現してきた見方はそのカテゴリーに分類される」とし²⁶、次のようにローティに賛同している。

彼が相対主義は構成主義とプラグマティズムの躓きの石にならないというのであれば、

ローティは正しいと私は思う。どのようにこの見方は私の世界の見方やそれへの私の関与に影響を及ぼすのかという、プラグマティストの問い (pragmatist's questions) を尋ねることが「何でもあり」へと確かに導かない。人が関与していることをよりよく探求するために、それは前提を解きほぐすことに導きうる。²⁷

ブルーナーはローティのいうプラグマティズムの反本質主義という特徴から、構成主義における相対主義の回避を導いている。その理路は次のようにまとめられる。認識の正しさの根拠は「実在との一致」になく、その認識を構成した際のパースペクティブとなる。したがって、認識を構成した際のパースペクティブに気づき、それがどのようなものを明示し、かつ、そのパースペクティブそのものが妥当であるか探求しないとイケない。その探求を可能にするのが「プラグマティストの問い」である。そして「プラグマティストの問い」を尋ねることで、「何でもあり」の相対主義へと導かれぬ。

ブルーナーがローティのプラグマティズム解釈を援用したのは、構成主義における認識の正しさを論じ、相対主義を回避するためであった。ブルーナーはグッドマンの世界制作論ではそれができないと診断した。それゆえ、ブルーナーは相対主義を回避する理路としてローティのプラグマティズム解釈を受容したことになる。

3. ブルーナーの構成主義とプラグマティズムの関係性

ブルーナーの構成主義では、実在の構成に関することがグッドマンの世界制作論から取り入れられ、認識の正しさの判断がローティのプラグマティズム解釈から取り入れられている。

ブルーナーの構成主義におけるプラグマティズムは、ローティのプラグマティズム解釈から取り入れられた「プラグマティストの問い」に示されている。グッドマンの世界制作論の受容を合わせれば、ブルーナーの構成主義におけるプラグマティズムは、古典的プラグマティズムというより、ネオプラグマティズムであるといえる。なぜならブルーナーの構成主義は「言語論的転回」(linguistic turn) を経ているといえるからである。

ローティによれば、古典的プラグマティストとネオプラグマティストを分けるのは、「経験というトピックを捨てて言語というトピックを取り上げ」てなされた「言語論的転回」を経ていることにある。ローティはこれを述べた際に、グッドマンをネオプラグマティストに位置づけている。加えて、ローティはグッドマンがルドルフ・カルナップ (Carnap, R.) の見解を当然視していると述べている²⁸。『世界制作の方法』(Ways of Worldmaking, 1978) にはグッドマンがカルナップの『世界の論理的構築』(Der Logische Aufbau der Welt, 1928) を批判的に発展させた考えが展開されているという指摘もある²⁹。グッドマンの世界制作論を受容したブルーナーの構成主義も言語論的転回を経っており、経験より言語というトピックを取り上げているといえよう。

実際、『可能世界の心理』(Actual Minds, Possible Worlds, 1986) がそうであるように、80

年代以降、ブルーナーはナラティブ（narrative）を研究対象としている。これはブルーナーがグッドマンの世界制作論を受容したと無縁ではない。ブルーナーはグッドマンのいう「世界」を捨て去ることで、ストーリーによって生み出される実在を扱えると述べている³⁰。加えて、ブルーナーは「私がナラティブに対してとるアプローチは構成主義的なもの——『世界制作』が科学であれ芸術であれ、心の主な機能であるということとその中心的な前提としてとる見方——である」³¹とグッドマンの世界制作論に依拠していることを明言している。これらより、ブルーナーはナラティブ研究において経験よりも言語によって生み出された実在に、世界制作論に即していえば、記号によって生み出された実在に関心があると見て取れる。

構成主義に立つブルーナーにとって「プラグマティストの問い」を投げかけるのは記号に基づいて構成された実在である。構成主義に基づくナラティブの研究では経験より言語がトピックといえる。それゆえ、構成主義に立ったブルーナーはネオプラグマティストとみなせることになる。

ブルーナーを古典的プラグマティストに位置づける見解は必ずしも誤りではない。なぜなら、1977年にブルーナーはそれまでの彼の研究は「これらすべては、ジェイムズ、デューイ…の伝統にしたがうように私を特徴づける」と、語っているからである³²。だからこの当時のブルーナーを、これまでの検討結果からいって、ネオプラグマティストとみるのは不可能である（『世界制作の方法』の出版は1978年である）。このことから、ブルーナーを古典的プラグマティストの系譜に位置づけるのは間違いではないが、構成主義の立場をとったブルーナーに対しては十全であるとはいえない。

ブルーナーが古典的プラグマティズムの伝統を引くという理解は、グッドマンの世界制作論をブルーナーが受容する前であれば正しい。しかし世界制作論を受容した構成主義に着目すれば、ブルーナーはネオプラグマティストの系譜に位置づくのである。

おわりに——ローティ以後におけるブルーナーの構成主義の課題

ブルーナーの構成主義はグッドマンの世界制作論を基盤としており、構成された実在の認識の正しさはローティのプラグマティズム解釈から導かれた「プラグマティストの問い」で判断される。「プラグマティストの問い」がブルーナーの構成主義におけるプラグマティズムであり、実在の構成が記号システムによってなされることからブルーナーをネオプラグマティストとみなせると本稿では結論した。

ブルーナーをネオプラグマティストとして、とりわけローティのプラグマティズム解釈を取り入れていることに注目したとき、検討しなければならない課題がある。それはニュープラグマティズム（new pragmatism）から突きつけられる課題である。

ニュープラグマティズムの代表者といえるミサックは、彼女が編者の『ニュープラグマティ

ストたち』(*New Pragmatists*, 2007)において、「本書のいくつかの論文は、『プラグマティズム』というラベルを、その特定の解釈から、すなわち、もたれるべき真理や客観性などない、連帯のみがある、ないしは共同体内の合意がある、あるいは私たちの仲間が言うことすまされるものがあるというローティの見方から明示的に取り戻すことである」とし、本書の論文は「人間の探究の客観的次元を適正にしようとする立場を明確にする努力で一体化されている」と述べている³³。

ここでのローティへの糾弾は、客観的次元よりも主観的次元（連帯や合意、言うこと）を重視しているということである。ミサックは主観性の重視ということで、ローティのみならず、ジェイムズも「急進的な主観主義」(radical subjectivism)として真理を個人の産物にしていると批判している³⁴。ブルーナーはローティのプラグマティズム解釈を参照するうえで、そこにおけるジェイムズの真理観について言及していた。ローティのプラグマティズム解釈を受容しているため、主観性の重視ということはブルーナーの構成主義にも当てはまる可能性がある。もしそうであれば、ブルーナーの構成主義においても「客観的次元」が適正に扱われているかという問いがニュープラグマティズムから突きつけられている。

ニュープラグマティズムによる客観的次元の問題はローティに端を発している。真理における客観的次元を問い直すことは、ローティ以後のプラグマティズムが取り組まなければならない課題といえよう。そして、例えば加賀裕郎がミサックのジェイムズ批判に対しジェイムズの真理概念における主観主義的な側面を擁護しているように³⁵、ニュープラグマティストが正しく、ネオプラグマティスト、特にローティのプラグマティズム解釈のような立場が誤りであるとするのは尚早であろう。

ミサックに突きつけられたローティ以後のプラグマティズムが取り組まなければならない真理の客観的次元の検討は、ブルーナーの構成主義においても必要である。これはブルーナーをネオプラグマティストとみなしたがゆえに浮上した課題である。今後の課題としたい。

付記

本稿は科学研究費補助金若手研究（課題番号20K13859）による成果の一部として「日本デュイ学会第64回研究大会」（2021年9月25-26日、オンライン（Zoom ミーティング）開催）の個人研究発表にて発表した「ブルーナーの構成主義におけるローティの影響について」の発表原稿に加除修正を行ったものである。

注

1 Howard Gardner, "Jerome Bruner as Educator: Personal Reflections," in David Bakhurst and Stuart G. Shanker (eds.), *Jerome Bruner; Language, Culture, Self*, Sage, 2001, p.128. David Bakhurst and Stuart G. Shanker, "Introduction: Bruner's Way," *op.cit.*, pp.16-17.

2 David Olson, "Possible Minds: Reflections on Bruner's Recent Writings on Mind and Self," *Human Development*, 1990, Vol.33, pp.339-340. Takaya Keiichi, *Jerome Bruner: Developing a Sense of the*

- Possible, Springer, 2013, p.15.
- 3 Marina Assis Pinheiro, "Contemporary Dialogues between Rorty's Pragmatism and Cultural Psychology: a Reading of *Jerome S. Bruner beyond 100*," *Integrative Psychological and Behavioral Science*, 2019, Vol.53, pp.707-716.
 - 4 Jerome Bruner, *The Culture of Education*, Harvard University Press, 1996, p.19.
 - 5 Jerome Bruner, "In Response," in David Bakhurst and Stuart G. Shanker (Eds.), *Jerome Bruner: Language, Culture, Self*, p.212.
 - 6 *Ibid.*, p.212.
 - 7 Nelson Goodman, *Ways of Worldmaking*, Hackett Publishing Company, 1978, p.94 (菅野盾樹訳『世界制作の方法』ちくま学芸文庫、2008年、172頁。)。〔 〕内引用者補足。
 - 8 *Ibid.*, p.4 (邦訳22、23頁。)。引用個所の傍点は引用者による。
 - 9 *Ibid.*, p.20 (邦訳47頁。)。引用個所の傍点は原文イタリック。邦訳を一部変更した。
 - 10 Jerome Bruner, *Actual Minds, Possible Worlds*, Harvard University Press, 1986, p.98.
 - 11 *Ibid.*, p.98.〔 〕内引用者補足。
 - 12 Nelson Goodman, *Of Mind and Other Matters*, Harvard University Press, 1984, pp.34, 42.
 - 13 Jerome Bruner, *Actual Minds, Possible Worlds*, p.99.
 - 14 Jerome Bruner, *Acts of Meaning*, Harvard University Press, 1990, pp.24-25.
 - 15 *Ibid.*, p.25.
 - 16 Anthony G. Amsterdam and Jerome Bruner, *Minding the Law*, Harvard University Press, 2000, p.35.
 - 17 Jerome Bruner, *Acts of Meaning*, pp.25-27. この箇所では『プラグマティズムの帰結』の該当箇所の引用やブルーナーの解釈を踏まえた要約で記述されているが、ブルーナーの『プラグマティズムの帰結』からの引用には正確でないところがある。その場合は注をつけて示している。
 - 18 榊田啓三郎の訳を参考に訳出した (W・ジェイムズ著・榊田啓三郎訳『プラグマティズム』岩波文庫、1957年、62頁)。
 - 19 Jerome Bruner, *Acts of Meaning*, p.25.〔 〕内引用者補足。ブルーナーの引用では、最初の "his point is that it is of no use..." となっているが、ローティの文では "his point was that it is no use..." となっている。また、引用者が〔 〕で補足した箇所 (the language with little bits of) がブルーナーの引用では抜けている (Richard Rorty, *Consequences of Pragmatism (Essays:1972-1980)*, University of Minnesota Press, 1982, p.162.)。
 - 20 この文をローティはプラグマティズムの第二の特徴を論じる際に挙げているが (Richard Rorty, *Consequences of Pragmatism*, p.164.)、ブルーナーは「反本質主義」を説明するうえで使用している。
 - 21 ブルーナーは「全称命題や仮言命題または理論」としているが、ローティの文では negative universal hypotheticals となっている (Richard Rorty, *Consequences of Pragmatism*, p.162.)。
 - 22 ブルーナーの引用では "explore practice rather than theory...action rather than contemplation" となっているが、正確には "is the vocabulary of practise rather than of theory, of action rather than contemplation" である (Richard Rorty, *Consequences of Pragmatism*, p.162.)。
 - 23 ブルーナーによる引用では "Does that assertion get it right" となっているが『プラグマティズムの帰結』では "Do they get it right" となっている (*Ibid.*, p.163.)。
 - 24 ブルーナーが『プラグマティズムの帰結』で参照している箇所にこの表現はない。したがって、ローティの表現ではなくブルーナーの表現である。
 - 25 ブルーナーによる引用では "What would it be like to believe that?" と "What would I be committing myself to if I believed that?" となっているが、『プラグマティズムの帰結』では、"What would it be like to believe that? What would happen if I did? What would I be committing myself to?" となっている (Richard Rorty, *Consequences of Pragmatism*, p.163.)。
 - 26 Jerome Bruner, *Acts of Meaning*, p.25.
 - 27 *Ibid.*, p.27.
 - 28 Richard Rorty, *Philosophy and Social Hope*, Penguin Books, 1999, pp.24-25 (須藤訓任／渡辺啓真訳『リベラル・ユートピアの希望』岩波書店、2002年、79～80頁。)。なお、索引ではこの個所のグッドマンがなぜかアンドリュース・グッドマン (Goodman, A.) とされている。この個所でのグッドマンは、ウィラード・クワイン (Quine, W, V, O.) やヒラリー・パトナム (Putnam, H.)、ドナルド・デイヴィットソン (Davidson, D.) と同列に並べられているから、索引の誤りであろう。
 - 29 松本晋「アメリカにおける論理実証主義とその批判的受容」、神野慧一郎編『現代哲学のバックボーン』勁草書房、1991年、174頁。
 - 30 Jerome Bruner, *Actual Minds, Possible Worlds*, p.105.
 - 31 Jerome S. Bruner, "Life as Narrative," 1987, in Jerome S. Bruner (ed.), *In Search of Pedagogy: The Selected Works of Jerome S. Bruner*, Vol.2, Routledge, 2006, p.129.
 - 32 Jerome S. Bruner, "Jerome S. Bruner," in Gardner Lindzey(ed.), *A History of Psychology in*

- Autobiography*, Volume VII, W. H. Freeman and Company, 1980, p.146.
- 33 Cheryl Misak (ed.), *New Pragmatists*, Oxford University Press, 2007, p.1. 傍点原文イタリック。
- 34 Cheryl Misak, *The American Pragmatists*, Oxford University Press, 2013, p.60 (加藤隆文訳『プラグマティズムの歩き方 (上) ——21世紀のためのアメリカ哲学案内』勁草書房、2019年、136頁。)。
- 35 加賀裕郎「ミザクのプラグマティズム思想史解釈の批判的検討——包括的プラグマティズム思想史構築に向けて——」『同志社女子大学 総合文化研究所紀要』、第31巻、2014年、40～41頁。